

すぎのこ



ザクロやキンカンはノーベル賞につながる

秋も少しずつ深まってきました。園ではグラウンドや大学広場にお出かけをして鬼ごっこやそり滑りをして遊んだり、園庭でコロリンジャンプや竹馬で遊んだりする姿が見られるようになりました。畑では大根や人参が大きくなってきました。十一月二日のバザーには年長さんが収穫した大根などをおうちの方に販売する予定ですが、順調に育っています。

園児に渡します。もらったザクロを走って嬉々としてお部屋に持って帰る姿は何ともかわいらしいものです。

スーパーには売ってなくとも、ザクロやキンカンの実が身近になつて、それが食べられること、そのことは小中学校の学習指導要領には何も書いてありません。大人になっても直接仕事や生活に必要なないことかもしれませんが、

ですが、ザクロを持って走っていく姿やキンカンを採って先生に見せる姿を見ると、とても貴重な事のように思えます。

先日ノーベル賞を二人の日本人の方



が受賞したニュースが流れました。これまで受賞した人は平和賞や文学賞も合わせて二十八人ですがほとんどの受賞者が、地方の公立(国立)高校出身だそうです。地方には自然がたくさん残っています。そのことが関連しているのでしょうか。

今年のノーベル生理学・医学賞を受賞することが決まった、大阪大学の坂口志文氏は「子供の時はごく田舎で、周りは田んぼと畑。本当に自然の中で。今のよう

に塾に行くことなどがないから、自然が豊かなところで暗くなるまで遊びまくった」と坂口氏のお兄さんは当時を振り返っておられました。二〇一五年にノーベル医学・生理学賞を受賞した大村智氏は、「科学教育において、私が最も重要だと思うのは、小さい頃から自然に触

れることです」(文藝春秋一八年三月号)と強調しておられます。

都会には都会の教育のよさがたくさんあることでしょう。ですが圧倒的な才能を生むためには自然の中で過ごすことは大切な要素なのかもしれません。

そういえば大谷選手も地方の出身。一〇奪三振と三本のホーム

ランを同じ試合で成し遂げるといふ圧倒的なあの能力は、野球に没頭できる環境があったから、言い換えると、好きなことに徹底的に向き合う時間があつたから、かもしれません。

自然の中で園児を育てることが、遠回りのような気がしますが、「急がば回れ」だと感じます。

「あの鬼は〇先生なの??」

先日年長組の前を通ると、何人かの園児が真剣な顔をして私を囲みました。どうやら質問をしたかったらしいのです。「何?」と尋ねてみると、「(節分の時に園に来た)鬼は、(運転手の)〇先生でしょ?」そこで、私は「園長先生かもよ。」と答えました。すると「園長先生じゃない。だって園長先生は鬼をやっつけたもん。」



「そうだね。やっぱり、あれは本物の鬼だよ。」

そう言ってもすっきりしない顔つきです。

運動会が終わりだんだん寒くなってきて、去年の冬の出来事を思い出したのでしょう。園児の心の中では「ずっと本物かな?それともだれだろう?」という心の中で揺れ動く思いが続いていたのでしょうね。そういえば、去年の年長さんにも尋ねられました。

続けて別の質問が...

「(お楽しみこども会に来た)サンタはだれなの?」

「本物だよ。」これまた怪訝そうな様子です。



本園に現れた鬼やサンタは、紙のお面をかぶった人間ではありません。子どもの夢をできる限り大切にしたい。

本物の鬼やサンタクロスです。

